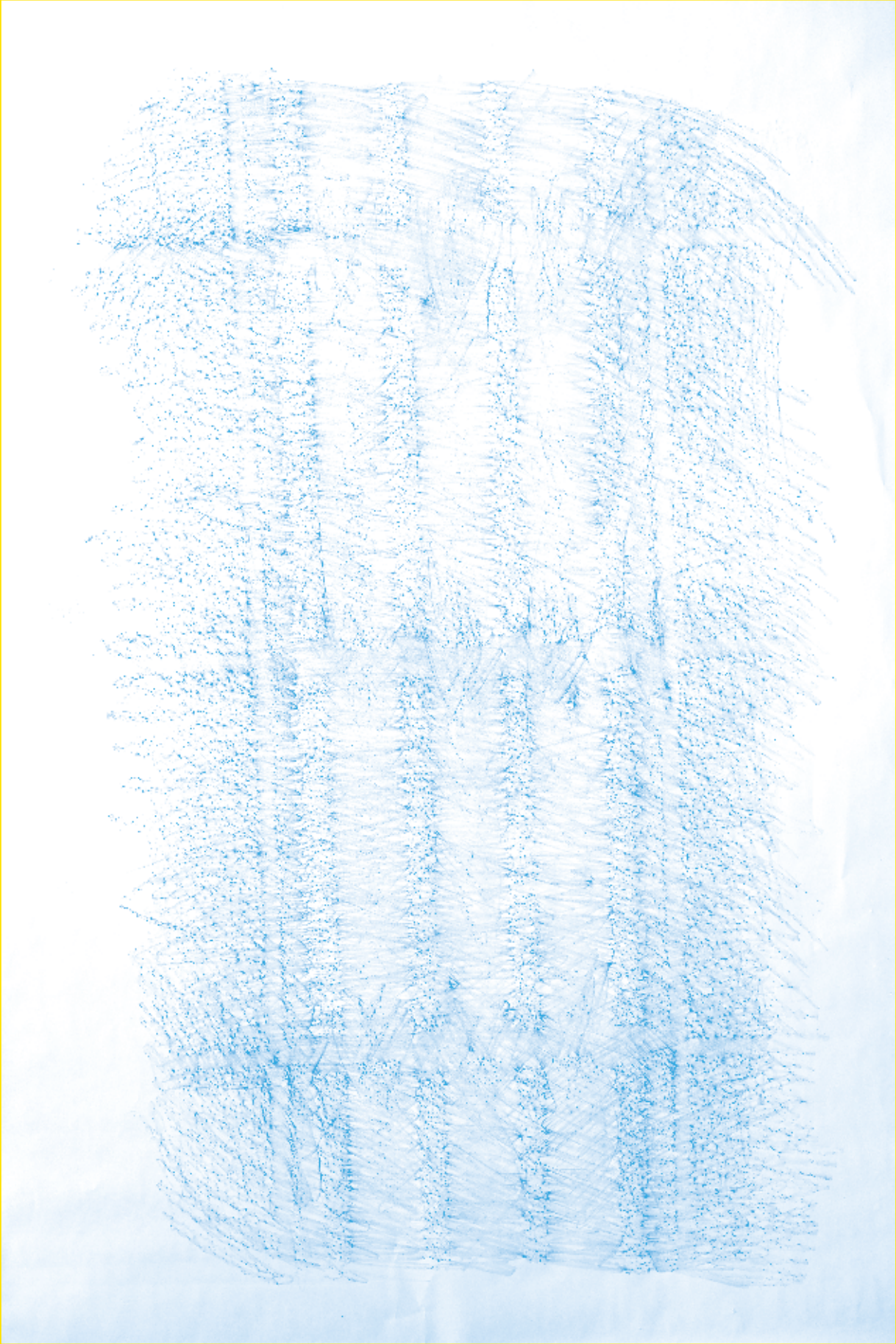
TAKE FREE

Magazine
for
Iwaki
Masters

igoku

vol. 14

紙のいごく



いごくとは、

いわき市でスタートした
「地域包括ケア」の取り組みの
“理念”を表す言葉。
「動く」という言葉のいわき弁。
人が健康で、幸せに、
より長生きできるように、
さまざまな企画、情報発信を
展開しています。

特集：視覚障がいと「わたし」

わからないから生まれるもの

特集：視覚障がいと「わたし」

わからないから生まれるもの

「おもしろそうな映画があるから来てみなよ！」あまり映画をみない私が、上映会にいくなんて言ったら、もうすぐ雨が降ると友達が言い出すかもしれない。
全国を旅する不思議な映画「目の見えない白鳥さん、アートを見にいく」に出会ってしまった私は、上映会後、新たな世界を知る旅へ出ようと決意していた。
私を旅へと突き動かしたもの。それは、「知る」を諦めない白鳥さんの姿だったのかもしれない。

今回の取材を担当しました

前野有咲
宇都宮大学コミュニティデザイン学科卒業。福島県いわき市を拠点に、コミュティデザインやインターンのコーディネーター、記事の執筆などに関わる。

全国を旅する話題の映画がいわきにやってきた！

２０２３年９月30日（土）、いわき芸術文化交流館・アリオスで、「目の見えない白鳥さん、アートを見にいく」の上映会が行われた。映画の監督を務める川内有緒さんは、９９，０００本の桜を２５０年かけて植樹する「いわき万本桜プロジェクト」を綴ったノンフィクション作品「空をゆく巨人」を執筆され、紙のｉｇｏｋｕ第10号「終活の違和感」でもエッセイを寄稿いただくなど、いわきとのつながりも深い。映画「目の見えない白鳥さん、アートを見にいく」は、全国各地の劇場や美術館をめぐりながら作品を届ける「自主配給」で上映されており、これまで約70ヶ所で上映会が行われてきた。いわきでも映画を上映したいという声が集まり、上映会の開催が決まった。

全盲の白鳥さんとみるアートって？

上映会のタイトルを聞いて疑問に思ったのが、目の見えない白鳥さんが、どのようにアートをみているのかということだ。視覚をつかわないアート鑑賞なのだから、聴覚や触覚が鍵になるのかもしれないと、「アート さわる」「アート きく」と検索してみると、「さわれるミュージアム」「耳で聴く美術」などの言葉がならんだ。白鳥さんは、美術館に展示されている絵画ではなく、視覚以外の感覚を使って楽しめる特別な作品を鑑賞しているのだろう、なんてイメージをもちながら上映会にのぞんだ。

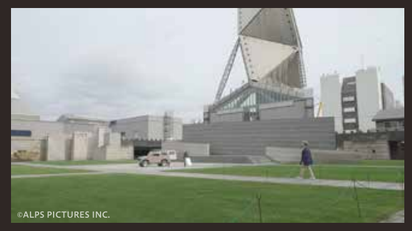
映画がはじまってすぐに、そのイメージは覆された。まず、映画の主人公、全盲の白鳥さんについて。白鳥さんは、電車に乗って自分の行きたい場所に行き、デジカメ片手にパシャパシャとスナップ写真を撮りながらまちを歩き、立ち寄った居酒屋でお酒を飲みながら友人と語らっていた。またある時には、「けんじの部屋」と題して、美術館に長期滞在しながら、全盲の自分の日常を来館者にみてもらう企画を行っていた。白鳥さんは、アートを楽しむ鑑賞者であるばかりか、自らの日常を展示するアーティストでもあったのだ！

目の見えない白鳥さん、アートを見にいく
三好大輔・川内有緒／ALPS PICTURES INC.

全盲の美術鑑賞者・白鳥建二さんの 20 年を振り返り、白鳥さんとその友人たち、美術館で働く人々、新たに出会った人々を追い、彼らが紡ぎ出す豊かな会話を追ったドキュメンタリー映画。ノンフィクション作家・川内有緒著書「目の見えない白鳥さんとアートを見にいく」が原案。

アリオス上映会
いわき上映会アフタートーク

上映後には、両監督といわき市在住の地域活動家・小松理虔さん、福島県猪苗代町にある「はじまりの美術館」館長の岡部兼芳さんを交えて、アフタートークが行われた。



そんな白鳥さんが行うアート鑑賞は、これまた予想から大きく外れていた。白鳥さんが編み出した「会話型美術鑑賞」は、目の見える人がアートを見て感じたことを、白鳥さんに言葉で伝えながら一緒に鑑賞するスタイルで、会話の中で特に大切にされていたのは、作品をみた「わたし」が何を感じるのかということだった。キャプションに書かれている作者のねらいなんてそっちのけで、白鳥さんは鑑賞者それぞれの捉え方や解釈の違いを面白がり、時にツッコミをいれながら、自分の中で作品像なるものを立ちあげていく。すると、アートを説明しようと意気込んでいた鑑賞者も、自由な白鳥イズムに影響されて、次第にみたまま感じたままを言葉にするようになっていく。白鳥さんは、作品そのものよりも、個人の内側にある思いや考えを表現＝アートと捉えて鑑賞しているのかもしれない。そんなことを感じた。

わからないから生まれるもの

アート鑑賞が好きな白鳥さんを通じて、アートや美術鑑賞に対する捉え方が広がったわけだったが、映画を見終えて、ふと疑問に思ったことがあった。それは、いわきで暮らす目の不自由な人たちは、どのような生活を送っているのかということだ。

当事者の中には、白鳥さんのようにアートが好きな人だけでなく、体を動かすのが好きな人もいるかもしれないと想像するものの、当事者との接点が少ない私は、いわきでの暮らしぶりを具体的に思い浮かべることができなかった。そう思ってハッとした。この「知らなさ」や「距離感」が、上映会前に抱いていた「目の見えない人は、特別な作品を鑑賞しているのだろう」という偏見を生み出していたのではないかと。

自分には関係ない、必要以上に相手を傷つけたくないと思うほど、距離をおいてしまう人も多いだろう。一歩、歩み寄ることで、新たな気づきがあるかもしれないのに。今の私に必要なのは、当事者のみなさんに直接会って、話すことなのかもしれない。会話を通じてアートを楽しむ白鳥さんたちの姿が、再び脳裏によみがえった。

暮らしから「視覚障がい」を知りたいと思った私は、
一緒にいわき駅前を歩き、椅子ヨガで整い、
現場で出会ったみなさんに話を聞いた。
そこから浮かび上がってきたいわきの現状とは？
旅の模様をレポートしていく。

とまどい続けるまちあるき

上映会からしばらく経ったある日、とある方との待ち合わせで、私はいわき駅の改札前に来ていた。待ち合わせの約束をしていたのは、いわき市盲人福祉協会の会長を務める関孝子さん。いわき市盲人福祉協会は、視覚障がい者の社会参加や当事者同士の情報交換、交流の機会をつくることを目的に、いわき市内でさまざまな活動を行っている団体で、関さんは2年前から協会の会長を務めているという。上映会後、当事者のみなさんの暮らしぶりを知りたいとコンタクトをとったところ、普段の活動でよく訪れている「平」でまちあるきをしましょうと取材を引き受けてくださった。

「こんにちは！」 約束の時間になり、改札の向こうからやってきた関さんは、白杖をもっていなかった。「私は全盲ではなく弱視なので、普段白杖はつかっていないんですよ」と関さん。何をどこまで聞いてよいのかわからず、「そうなんですね」という受け応えしかできないまま、まちあるきがスタートした。

点字ブロックは2種類あり、でこぼこが線になっているのは「誘導ブロック」で、丸い点になっているのは止まれをあらわす「警告ブロック」。横断歩道を渡る時は、音の出る信号機だけでなく、横切る車の風でも判断しているんだとか。関さんが説明をしてくれたポイントは、当事者のみなさんにとっては常識なんだろうと思いつつ、私にとっては関さんと一緒に歩かなければ素通りしてしまうものばかりだった。初めての場所を冒険しているような感覚でまちを歩いていると、最初はぎこちなかった関さんとの会話も少しずつはずみ、好きなアーティストやJ-POPの話で盛り上がった。

まちあるきも終盤。道端で信号を待っていると、向こうから自転車に乗った男性がやってきた。進行方向に立っていた私たちの方に、ベルを鳴らしながら猛スピードで向かってくる。あわててよけながらすれ違いざまに男性の顔を見ると、どうしてもっとはやくよけないんだと顔をしかめていた。どれだけ環境が整っていたとしても、こうした心ない対応が暮らしにくさにつながっているのかもしれない。「基本的にまちは健常者のためにつくられているんですよね」という関さんの言葉が頭から離れなかった。

自分の殻から抜け出すために

「直接お会いしたいです」と言ったものの、まちあるき中の私の対応はどうだったのだろうか。モヤモヤがピークに達した私は、「理想の関わりってなんですかね…」と心の声をもらしてしまった。それをひろっていた関さんから、こんな答えが返ってきた。

「視覚障がい者だからと決めつけてしまう前に、まずはいろいろ聞いてもらえたらうれしいです。なんでもやってあげないとと思われる方もいますが、それが本人にとって必ずしもいいことであるとは限りません。手助けが必要であれば言ってくださいねと伝え、見守ること。これがお互いにとって心地よい関わりだと思います。」

何もできていないからといって、相手を傷つけているわけではない。むしろどうすればよいかわからない時ほど、相手の声を聞いてほしい。関さんはそう言っていた。わからないから遠ざかるのではなく、わからないから言葉を交わすのか…。関さんに会おうと思った原点に立ち返った気がした。

「盲人福祉協会に入ってから友達が増え、自分の殻に閉じこもらなくなったんです。もともと活発なタイプですが、さらにいろんなところに足をのばしています。こうして殻から抜け出せたのは、他者との関わりがあったからですね。どんどん地域にはみ出していって、私たちと一般の方が交わる機会を増やしていきたいと思います。」

軽やかに語る関さんをみて、私の対応は…と自分の殻に閉じこもろうとしていた自分が恥ずかしくなった。せっかくこうして関さんと出会えたんだからと、他の活動について聞いてみることにした。

「観る」からみえるもの

安心していられる場所

盲人福祉協会以外でも、視覚障がい者のみなさんに向けた活動が行われていると関さんに教えてもらった私は、毎月第1水曜日に豊間地区で開催されている「椅子ヨガ」に参加した。会場では、準備された椅子に座っておしゃべりを楽しんでいる方もいれば、キッチンで昼食の準備をしている方もいて、まったりとした時間が流れていた。駅からバスに乗り継いで会場に向かっていた関さんも到着し、さっそくヨガがはじまった。

講師を務めるのは、いわき市でアーユルヴェーダ施術や出張ヨガ教室を行う「Re.yoga Lotus（リヨガ ロータス）」の藁谷弘子さんだ。藁谷さんは、2015年から「バリアフリーヨガ」と題して、参加者のニーズや状態、できることに合わせて、椅子ヨガや白杖をつかった「白杖ヨガ」を独自で開発してきた。

一緒に混ざってヨガをやろうと後ろの方に座っていると、藁谷さんに「まず自己紹介をお願いします」と声をかけられた。私のようにはじめて参加する人だけが自己紹介をするのかと思っていたら、私に続いて参加者のみなさんも一言ずつ自己紹介をまわしていく。そう、この時間は単なる自己紹介ではない。

インストラクターの藁谷さんはヨガやアーユルヴェーダの本場・インドに渡り、心のケアやセラピーのためのヨガを学んだ

この空間に誰がいるのかを共有し、リラックスしてその後のヨガに取り組んでもらうための自己紹介タイムだったのだ。

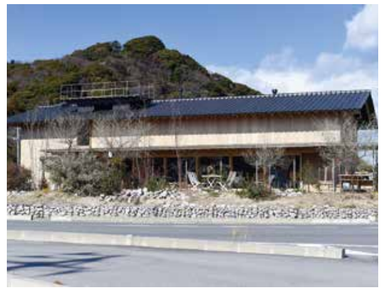
自己紹介が終わり、いよいよヨガがスタート。藁谷さんは、「気持ちいいと感じるところまでで大丈夫ですからね」と声をかけ、全体の様子をみながらプログラムを進めていく。参加者のみなさんは、藁谷さんの「声」からポーズの動きをキャッチする。そのため、ポーズの指示は、体の向きや腕を伸ばす位置まで常に細かく伝えられていた。

しばらくすると、「今日はこっちの腕が重いな」「いつもより集中できていないかも」など、参加者からボソボソ声があがってくる。長年続いているヨガということもあり、自分の内側や体の変化に意識を向けている方の姿がたくさんみられた。ヨガの様子を観察するんだと意気込んでいた私はというと、場の心地よさに身を任せているうちに、安心しきってうっかり眠りそうになっていた。

関わりをデザインしていくこと

2時間ほどのプログラムを終えて、お昼の時間になった。キッチンで準備を行っていたのは、いわき市平にある木村眼科クリニックの副医院長の木村恵子さん、そして参加者のみなさんの移動をサポートする「同行援護」の資格をもったヘルパーのみなさんだった。ヨガを終えた参加者に声をかけて、ご飯が並ぶ机のほうに案内をする。

「いただきます」の挨拶のあと、ランチ&交流会がはじまった。食べ始める前に「1時の方向にあるのはりんごで、4時にはスープがあります」と、ヘルパーさんが今日の献立とお皿の位置を説明していた。たしかに、右ななめ前には…という曖昧な表現よりも、時計で説明されるほうがわかりやすい。ヘルパーさんを見習って、私も同じテーブルに座っていた方に料理の説明をしてみた。


鳴き砂が美しいことで知られる豊間海岸の近くにオープンした「兎渡路の家」。太平洋を一望できる屋上デッキも完備

ご飯を食べながら、仲間たちといわきから鎌倉遠足に行った話や出演予定のラジオ番組の話などいろんな話を聞かせてもらった。参加者の一人が、「ここに通うようになってから明るくなった気がします」と話す姿をみて、自分の殻から抜け出せるようになったという関さんの言葉を改めて思い出していた。

ヘルパーさんとの移動、藁谷さんのヨガ、お昼ご飯、仲間との談笑の時間。3時間のプログラムの中で、喜びを感じる瞬間は人それぞれだろう。しかし、こうしてさまざまな「関わり」をデザインすることが、みなさんが人生を捉え直すきっかけにつながっているのかもしれない。そんなことを感じた。

環境から安心を支える

視覚障がい者のみなさんの活動を支えているのは、「人」の力だけではない。ストレスなく過ごせる施設の「環境」にも秘密があるのかもしれない。そう思った私は、恵子さんと、当日たまたまヨガに参加していた施設の大工さん、「合同会社ミヤガワ工房」代表の宮川英二さんに話を伺った。

ヨガの会場となったのは、2021年1月に豊間地区・兎渡路にオープンした「兎渡路（とところ）の家」。正式名称は「木村眼科クリニック兎渡路事務所（研修センター）」で、木村眼科クリニックの木村肇二郎先生と木村恵子さんの「目の不自由な人たちが気軽に集まれる場所をつくりたい」という思いが形になった施設だ。

私なりに「兎渡路の家」を紹介するならば、「多様な人が混じり合い、みんなのやりたいが集まる福祉拠点」と伝えるだろう。はじめに、福祉拠点の「機能」について。まず、入り口のすぐそばにあるトイレ。黒タイルの前にトイレが配置されていて、弱視の方でも判別できるように色のコントラストが意識されている。踏板の色が交互に変わる階段も同様で、段差を認識しやすくするための配色だ。

次は、「内装・インテリア」。宮川さんが知り合いの材木屋から仕入れたという建材を使った、木のあたたかみが感じられる内装、木村眼科のみなさんがかつて使っていた医学書や「本日休診」の札が並ぶディスプレイもある。室内の家具も含めて、すべて「本物」にこだわっていて、一度来たら誰かに自慢したくなるようなおしゃれな空間だ。視覚障がい者だけでなく、ヘルパーや家族、多くの人にとっての心地よさが考えられていると感じた。

寄り添う姿勢には、終わりがない

施設を紹介してもらった後、「兎渡路の家」立ちあげのストーリーも教えてもらった。「木村眼科クリニックに通う視覚障がい者の中には、治療をしても病気を治せない方もいて、家に閉じこもってしまう人も多いんです」治療以外の方法でなにかサポートすることができないかと考えた恵子さんは、椅子ヨガをはじめ、視覚障がい者のためのパソコン教室、音声ガイド付き上映会、サポーター講座などのさまざまなイベントを企画・運営してきた。

活動を続ける上で、ネックになっていたのが会場の手配。これまでは、クリニックや施設の一室を借りて行っていたが、制限がある中での開催となることも少なくなかったという。のびのび活動できる拠点を構えようと、肇二郎先生がかつて入院していた「いわき病院」周辺の土地を見つけ、拠点の計画を進めた。

拠点の構想が持ちあがった時に恵子さんが真っ先に声をかけたのが宮川さんだった。二人は10年来の付き合いで、「宮川さんと出会っていなければ、拠点をつくろうと思っていなかったかもしれない」と語るほど、恵子さんは宮川さんの仕事ぶりに信頼を寄せている。

「仕事はずっと勉強だから」と隣で照れ臭そうに笑う宮川さん。宮川さんは、15歳で大工の道に入り、設計や施工の現場に長年関わってきた。「個性的な住まいづくり・家具づくり」を掲げ、最近は市内のギャラリーの施工も手がけているそう。（宮川さん自身も、デッサンを描くアーティストだ！）

そんな宮川さんが大切にしているのが、生活や暮らしに寄り添う姿勢だ。「つくって終わりではなく、自分の現場には今でもずっと関わっています。後からなおさなくちゃいけないところも出てくっからね」と宮川さん。

施工前には、遠足に同行して視覚障がい者のみなさんと一緒に過ごしたり、全国のバリアフリー施設を恵子さんらと共に巡ったという。使いにくい部分や恵子さんのリクエストがあれば駆けつけ、現在進行形で「兎渡路の家」の改善や改良を重ねている。寄り添う姿勢には終わりがないことを、建築士という専門領域の立場から体現していると感じた。

「建物がいいもんだから、アイディアがどんどん出てくるんですよね」という恵子さんの言葉の通り、最近は環境問題や動物福祉に取り組む団体も「兎渡路の家」でイベントを開催しているそうだ。人の手が加わり続ける「兎渡路の家」は、塩屋埼灯台に次ぐ、第二の灯台となるのかもしれない。

持ち前の行動力で輪を広げる恵子さんと、確かな技術で「兎渡路の家」を支える宮川さん。抜群のコンビネーションだ

自転車がつくる関わりしろ

最後に話を聞きにいったのは、障がい者のための自転車競技「パラサイクリング」のナショナルチームとしてパラサイクリングアスリートの育成・強化や体験会などの普及活動を行う「一般社団法人日本パラサイクリング連盟（JPCF）」事務局の寺澤亜彩加さん。実はJPCFの拠点はいわきにあり、2021年11月よりいわきFCパーク1階で自転車文化発信・交流拠点「NORERU?」を運営している。

そんなJPCFが掲げるミッションのひとつが、「障がいというバリアを越え、誰もが生きやすい社会を実現する」だ。スポーツには、国籍や人種、性別や年齢、障がいといった壁を越える力があるという考えを大切にし自転車を通じて誰もが笑顔になれる「共生のまちづくり」事業を推進している。

寺澤さんは、恵子さんや藁谷さんと連携しながら視覚障がい者のみなさんに向けた活動も行っていて、「兎渡路の家」では毎年「タンデム体験会」を開催しているという。この「タンデム」は、サドルとペダルが2つある二人乗り自転車で、2023年7月より日本全国の公道で走行が可能となった。ニュースで名前を聞いたという方も多いのではないか。

寺澤さんらが行うタンデム体験会では、前にタンデムパイロットと呼ばれるボランティアの方が、後ろに視覚障がい者のみなさんが乗り、ふたりで息を合わせてペダルをこぎながら前に進んでいく。

自分の足でペダルをこぎ、風や空気を全身で感じる。そして、乗れた喜びや感動を同じのりものに乗る仲間と共有する。「最初は不安そうにしていたふたりが、『楽しかった！』『これだったら私も一緒に乗れるんだ！』と笑顔で帰ってくる姿を見るたびに、障がいのある人もない人も一緒に楽しめるタンデムは、障がいの壁を越えるコミュニケーションツールのひとつだと再確認するんです」と語る寺澤さん。

「まずは視覚障がい者のみなさんと出会ってもらいたいです。うまくいかない関わりがあったとしても、そこでの気づきが今後の行動につながると思うので。きっかけをつくっていくために、タンデムを広めていきたいですね。」関わるきっかけや手段は「言葉」だけではない。寺澤さんの話を聞いて、とまどいつづけた関さんとのまちあるきを、ポジティブな体験と捉え直せるようになった。

会いたい人がいるときは、タンデム自転車も一緒に持っていくという寺澤さん。タンデムは寺澤さんにとっても「相棒」だ

まとめ

わからないから、知りたい

関さんとまちを歩き、藁谷さんのヨガに参加したことで、映画を見た直後よりも、いわき在住の視覚障がい者のみなさんの暮らしに対する解像度が上がった。また、恵子さんや藁谷さん、宮川さん、寺澤さんの話からは、自分の専門性をいかしながら、当事者のそばで、その人らしい暮らしを支えるアプローチを学んだ。気づいていなかっただけで、自分の身近なところに視覚障がいについて知るきっかけが、すでにあったのだ。

取材を経てより強く思うのは、どれだけ取材を続けても当事者のみなさんを100%は理解できないし、現時点で私はどこまでも視覚障がい者にはなれないということだ。常に「わからない」が生まれている状態とも言い換えられるかもしれない。「わからない」時点だけを切り取るとネガティブな状態と捉えられがちだが、果たしてわからないことは、本当にネガティブなのだろうか。

今回の私がそうであったように、「わからない」は時に「知りたい」という原動力に変わり、多くの人との出会いや新たな気づきを私にもたらした。これは、わからないをポジティブに捉え直したことで、生まれた結果ともいえるだろう。今後も、わからないをシンプルに受け止め、相手や社会に目を向けていきたい。その積み重ねがきっと、私たちの側にある偏見をなくし、誰もが自分らしくいられるまちをつくると思うから。

目の見えない白鳥さんと時間を過ごしたら嵐が起こった

文＝川内 有緒

アジアにやってくる台風の名前は一四〇もあり、様々な言語から取られている。台風第一号の「ダムレイ」はカンボジア語で象、日本語からは「カジキ」とか「コグマ」なんかもある。なんなら「ハクチョウ」があっても良さそうだ。

この四年をふりかえったしは「白鳥」と名付けたいような嵐の中にいた。ハクチョウではなく、シラトリと読む。全盲の美術鑑賞者・白鳥建二さんと過ごした日々のことだ。

白鳥さんとは、二〇一九年の初頭に出会った。二〇年来の友人のマイティが「白鳥さんと一緒に作品を見ると楽しいよ。今度、みんなで美術館に行こうよ」と誘ってくれた。

目が見えない人がアートを見るだって？　どうやって？　触る？　感じる？　オーラ？　そんなふうに頭をぐるぐるさせながら美術館に向かった。

実際に会うとあっさりと謎は解けた。目の見える人々が、絵や作品のあれやこれやを言葉で説明するのである。

最初に見た作品は、ピエール・ボナールの『犬を抱く女』。絵画のなかの人物や犬の様子、服や壁の色、食卓の上にあるものを描写していく。白鳥さんから側からの質問はほとんどなく、たまに「ふうん」「へえ！」などと相槌を打つだけだ。私にはなんの予備知識のない作品だったので、「女性が犬の後頭部を眺めています。シラミを探してるんだと思う」と、実にいい加減な説明だ。こんなんでいいのだろうか、いや、いいわけないだろうと思うのだが、いたし方ない。

そんなことより、何作か続けて一緒に見るうちに、自分の中で思いもよらぬ変化が現れた。白鳥さんに説明しようと作品を細かく観察し、言語化するうちに、それまで見えてなかったものが見えてきた。まるで目の解像度があがったみたいだ。この女性はどうしてこんな悲しそうなんだろう？　この物体はなんだ？　といろんな疑問が渦巻いていく。

最初は、目の見える私たちが白鳥さんに絵を見せてあげるんだ、という妙な気負いがあったが、それがさーっと消え失せ、気がつけば逆に白鳥さんに絵を見せてもらっているような感覚になった。わおー、こりゃ、面白い！

その後、私と白鳥さんとマイティの三人は、日本各地の美術館をめぐった。私はその体験を一冊にまとめ、二〇二一年九月に『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』を出版した。アートの解説本ではなく、ただ作品を前にして生まれた自由な会話を断片的に収録したものだ。こんなに適当な会話が三三六ページも連なる本を買う人は決して多くないのは明らかである。おかげで発売の朝は担当編集者に会うなり「書店さんに申し訳ない気分です。謝罪行脚に行きましょう！」と言ったほどだった。

しかし、予想に反して、本はけっこうな数の人に読まれた。私はたくさんのインタビューを受け、本は何度も増刷され、しまいに二〇二二年のＹａｈｏｏ！ニュース一本屋大賞２０２２年ノンフィクション本大賞にも選ばれた。これにはたまげた。まったく人生何が起こるかわからない。

あげくの果てに、私は白鳥さんを追った長編ドキュメンタリー映画『目の見えない白鳥さん、アートを見にいく』を自主制作することを決意した。だって、白鳥さんという人がやっぱり面白いんだもの。こちらは映像作家の三好大輔との共同監督作品である。二〇二三年春に公開し、約一年をかけて映画館や美術館、映画祭や特別上映会など全国約七〇カ所で上映された。「大ヒット！　全米が涙した！」というわけではない。それでも、三好と私が漕ぐ小さな船は未知なる海域を進み、嵐・シラトリに飲み込まれた。

話をいったん白鳥さん自身に戻そう。彼がよく聞かれる質問に、「みんなの説明や描写を聞いて頭の中にどんなイメージを持つのか」というものがある。そりゃ、気になるよね。私も出会ったばかりの頃は大いに気になった。そんなとき、白鳥さんは「説明を聞いてイメージができることもあれば、できないこともあるけど、それはどちらでもいい」と言う。どっちでもいってなに？　余計に混乱を覚えるが、だんだんとその意味がわかるようになった。彼にとってみんなで作品を見ることのゴールは、頭の中に正しいイメージを作りあげたり、みんなのイメージをシンクロナイズすることではない。

「みんなで一緒に見て、そこで起こる会話や起こるできごとが好きなの。だから、説明が正しいか正しくないかはどちらでもいい。だから俺は、美術が好きというよりも、美術館が好きなんだ」

そっか、白鳥さんはただその場で生まれる会話自体を楽しんでいる。よく考えれば、それは自分も同じかもしれない。友人同士で一緒に旅行に行くとき、全員が同じものを同じように見ているわけではない。海辺で食べたお弁当が思い出に残る人がいれば、新幹線の車両が気になる人もいる。お土産に宝石を選ぶ人もいれば、貝殻を拾う人もいる。わたしたちは一緒にいながら、常に違う世界を生きている。それでは、どうして一緒に旅をするのかというと、一緒にいて楽しいからに他ならない。当然、同じお弁当を同じように楽しむことが目的ではない。

だいたい、やろうと思ってもそんなことは不可能だ。一刻一刻と変化する万華鏡のように、我々の一人ひとりの頭の中に広がる宇宙は常に姿を変え続けており、それを他の人と共有することは不可能なのだ。だからこそ、この世は大変でめんどうくさくて面白いとも言える。

白鳥さんは、「全盲の美術鑑賞者」として、全国の美術館で鑑賞ワークショップのナビゲーターを務めている。先程の白鳥さんの鑑賞ワークショップの中で一番長く続いているのは、水戸芸術館の「セッション！」である。その名の通り、その場に集まった人たちがジャズのセッションのように自由に言葉を重ねていく。

たまに、学校なんかでもワークショップを行うこともあるらしい。とある高校で、白鳥さんは美術部の子達と一緒に鑑賞するということになった。その打ち合わせの時、先生が何気なく「普段あまり発言しない生徒も話してくれるといいですね」と言ったそうだ。そのとき白鳥さんは、いや、無理に話さなくても大丈夫です、ただその場にいるだけでいいんじゃないですか、と答えたとか。

実際、白鳥さんは、みんながしーんとなり、沈黙している時間も好きだと言う。なるほど、そう考えると、全員が一言でも発言するのがいいとか、話が盛り上がれば成功といったありがちな基準は必要ないのかも。そういった評価基準をぱかっと取り外してみれば、もはや失敗も成功もなくなる。そこに広がるのは、ひたすら自由な地平線だ。

そんな白鳥さんの影響もあり、私も偶然に出会ったもの、そこに居合わせた人と何かをしてみたいと思うようになった。あらかじめ決められたゴールに向かうために必要な能力を精査し、才能を結集させるのではなく、偶然に出会った人とできることをするのだ。

そんな私の考えが如実に現れたのが、先の映画宣伝・配給チームである。話は前後するが、映画は自主配給、つまりは配給会社を通さずに自分たちで直接劇場と交渉し、世に送り出している。当然、膨大な事務作業が発生し、その多くを共同監督の三好と二人でこなしていた。しかし二人とも本来はクリエイターなので、ＳＮＳとかお金の計算とか、工程管理も全く好きではない。我々には誰かこの小さな船に乗ってくれる人が必要だった。

この時、二人の人物が私たちの頭に浮かんだ。一人目はＰＩＥＮＯ（パイーノ）さん。あるトークイベントの後に、二分くらい立ち話をしただけの人だ。ただＳＮＳでは繋がっていたので、普段はりんごの行商で生計を立てていて、音楽や本をこよなく愛していることを知っていた。言葉では言い表しにくいが、ピンと来るものがあった。こうして私たちはＰＩＥＮＯさんに「配給仲間になって欲しい」とお願いし、彼も「いいですよ、お手伝いします」と言ってくれた。

もう一人は、私が講師を勤めたワークショップに参加してくれた一八歳の青年、Ｓくんだ。彼は小学生の頃から学校に馴染めず、高校はＮ高へ進学。私が出会ったのは、ちょうど高校を卒業したばかりの頃で、働いた経験はほとんどない。彼は未来を模索しつつも、たいていは家にひきこもっていて「ときおり孤独すぎて、ぬいぐるみを抱きしめています。この歳になって変だとは思うけど、今の自分にはぬいぐるみしか抱きしめるものがない」と話してくれた。その心細そうな声を思い出し、「映画のあれこれを手伝ってみない？」と声をかけた。

彼はどうやら夜行性で、午後まで寝ているようだが、私たちにはノープロブレム。それよりも、後から知ったのだが、彼は我々が苦手とする工程管理やＩＴ分野が得意分野だった。こうして、背景も性格もスキルも年齢もバラバラの四人で構成される配給・宣伝チームができあがった。あれから一年半が経つが、二人は今でもそれぞれのペースで映画に関わってくれている。

もちろんロケット・サイエンスでは、そうはいかない。英語には、It is not rocket science、という慣用句があって、「ロケット・サイエンスじゃないんだから」「そこまで難易度が高くないよ」というほどの意味で使われる。なるほど、ロケットを作り上げ、宇宙まで無事に届けることは至難の業で、紙一重のミスや遅れが人の命を脅かす。そんな世界では「偶然に出会う人々と生まれるものを見てみたい」とは言いにくいだろう。しかし、ロケットと美術作品が等しくこの世にあるように、ロケット的思想と白鳥さん的思想は「世界」という複雑な地層のなかで共存している。

かくて、白鳥さんに出会った日は、私にとっては特別な日だが、白鳥さんにとってはごく普通の一日だったらしい。白鳥さんやマイティの周囲には、美術が好きな人は大勢いる。だから私は、彼の友人・マイティが連れてくる「目が見えてアート好きな人」のひとりに過ぎない。

そもそも、白鳥さんが美術館に行ったきっかけは、大学生の頃に付き合っていた彼女（Ｓさん）が「美術館に行きたい」と言ったことだ。それまで白鳥さんは美術館に行ったことがなかったが、「美術館デートをしてみよう」と思い立ち、ふたりでレオナルド・ダ・ヴィンチの解剖図展を見にいった。白鳥さんは美術館の雰囲気にワクワクし、「全盲でも美術館で作品を見ることができるのかも」と思いついた。その後は、自ら美術館に電話をかけ「作品を見たい、どなたか一緒に歩いてもらえませんか」と頼むようになった。Ｓさんのおかげでライフワークと出会えたわけなので、ダ・ヴィンチ展の日は、ずいぶんと思い出深い日だろう。

さて、一方のＳさんにとってはどうだろうか。

実は、例のドキュメンタリー映画の上映がきっかけとなり、久方ぶりに白鳥さんとＳさんは再会を果たした。そのとき二人は、ダ・ヴィンチ展の話もしたらしい。白鳥さんが「ダ・ヴィンチ展のことだけど……」と話を始めると「あ、その展示に私も行ったよ」と答えたそうだ。いや、二人で一緒に行ったんだよ、と白鳥さんが言うと、そういえばそうだったね、とようやく思い出したとか。白鳥さんは、その話をしてくれた時、楽しそうに笑っていた。あの日が彼女にとってはごく日常的な日だったことは、むしろ嬉しいことなのかもしれない。

最後に、もうひとつ。本や映画を見て、「白鳥さんは目が見えないのに美術館に通うなんて本当にすごい、いつか一緒に見てみたい」と感想を送ってくださる方がいる。その度に私は返信を書き、いえいえ、そんなに特別なことでもないのです、目の見えない人の中で美術館に行く人はけっこういるんですよ、あなたの周りにもいるかもしれません、とお伝えしている。

目の見えない白鳥さんとアートを見にいく
集英社インターナショナル

川内 有緒
かわうち　ありお
1972年東京都生まれ。日本大学芸術学部卒業後、米国ジョージタウン大学で修士号を取得。シンクタンクや国連機関勤務を経てフリーランスのライターに。『バウルを探して』（幻冬舎）で第33回新田次郎文学賞、『空をゆく巨人』（集英社）で第16回開高健ノンフィクション賞受賞。

包括かわら版

地域包括ケア推進課からのお知らせをお伝えいたします。

そうだ！　国際福祉機器展に行こう！

～いわき発・おでかけを諦めない取組み～

国際福祉機器展は国際展示場「東京ビッグサイト」で毎年開催

市内で作業療法士として活動する廣渡一隆さん。身体に不自由があっても「おでかけ」を諦めたくない。リハビリ利用者の方の想いから「おでかけ」企画を立ち上げました。今回は発起人・廣渡さんに、企画にかける想いを聞きました。

ある話題で意気投合

私の自費リハビリを利用されている鈴木圭子さんとは、リハビリの間、様々な話をしている。体や動き方のことはもちろん、リハビリの方向性や時には社会情勢についても。「麻痺などの不便さが解決できるような用具があるといいな」という話から、国際福祉機器展という色々な福祉用具を見たり体験したりできる大きな展示会があることを話したところ、「是非、行ってみたい」「障がいがあってなかなか出かけられないような方も一緒に行けるといいんじゃないか」という思いが聞かれた。

それは、展示会そのものが出かけるキッカケになって、福祉用具を利用する方とサポートする側が一緒に過ごすことで思いが知れて、どんなサポートが必要か、どんなサポートができるか、色々な気づきがあることが互いにとって貴重な機会になるのではないか。以前に「市内で、障がいのある方が出かけている姿をあまり見ない」と言っていたことも手伝って、すぐに「行ってみましょうか」ということになった。また、せっかくだからリハビリを学ぶ学生さんにも声をかけてみようという話になった。

25年前の経験が力に

人から見ると簡単に行動したように見えるかもしれない。ただ、私が即決できたのは25年程前のある経験があったからだ。

その頃私は、東京都内の保健所の出先機関で働いていた。介護保険もまだない時代で、今でいうデイケアを行政が担っていた。そこに、精力的でおもしろい保健師さんがいて、利用者さんとの一泊旅行を企画していた。

その時の利用者さんと参加を希望する家族、そしてそれをサポートする職員、私の知り合いの療法士、更には福祉用具取扱業者の方など総勢40～50人ほどで、観光バスを利用しての旅行だった。車椅子利用の方は2人で介助して、休憩ごとの乗り降りをした。宴会では飲酒する方もおり、日頃ベッドを利用している方の中には大部屋の布団で寝る方もいた。帰る頃には身体の動きが良くなる方も多く、楽しい時間を過ごした。

こんな経験から、この日帰りの企画は可能だと、すぐに思ってしまったのだ。（まあ、そんなに簡単ではなかったが。）

実現に向けて動く！

2023年9月の国際福祉機器展に向けて2022年12月から広報を開始。自身のFacebookやブログでも、企画を宣伝した。

初回の説明会は、2023年2月にzoomにて開催した。どのくらい集まるのか非常に不安だったが、発起人の2人以外に、ケアマネジャー、介護福祉士、民生委員、作業療法士などの方々が参加してくれた。この説明会は、9月まで毎月1回開催し、企画の狙いや実際の移動手段、費用のことなど、意見を交わしながら「想い」を「現実」へと形づくっていった。

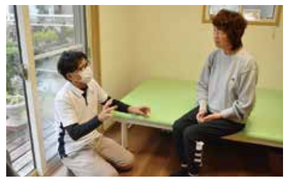
しかしながら参加希望者は思いのほか増えず、この企画を「もっと多くの方に知ってもらいたい」「安心して話を聞いてもらいたい」という思いから、市や、県作業療法士会いわき支部へ働きかけ、後援をいただいた。

4月には参加者募集のポスターを作成し、市内各所へ配り歩いた。同時進行でホームページを作成。これらは実行委員として動き出した有志のメンバーが時間を縫って作成してくれた。

7月には参加希望者が決まり、参加者に合わせて交通手段を具体的に決める段階に。実行委員の中から「公共の手段で行かないと万一の時の責任を負いきれない」という意見が出たことで、介護タクシーと鉄道のチームに分かれる方針とした。費用捻出に苦慮したが、協賛金を募ると、企画の趣旨に賛同してくれた介護事業所や複数の企業から協力をいただけた。結果として、介護タクシー利用の方も鉄道を利用した方と同程度の負担で出かけられるようになった。

会場へ移動中の介護タクシーチーム

ほぼ時間差なく会場に到着し全員での一枚



企画発起人の廣渡さん（左）と鈴木さん（右）

多くの願いを叶える

企画参加者の中にはいわき市外の方も2名いた。現地では会場の広さに一同驚愕しつつも、時間の許す限り見て回り、無事帰路についた。（※当日の様子や参加者の感想は、WEBのいごくをご覧いただきたい）

今回の活動を通して、同じ思いを持つ人が集まれば、誰かの「でかけたい」という思いを実現する機会が増えるのではないか、というひとつの結論に至った。そういった人が集まる場・きっかけを作りたい。身体に不自由があるからといって、出かける手段に困ったり、家族に言いにくかったり、出かけたい気持ちがすぐにしぼまないようにしたい。

一方で、やっていて楽しくないものは続かないとも思う。楽しんでやっていける場、機会、雰囲気を作り、関わる全ての人が「携わって良かった」と思えるような集まりに繋げていきたい。そして、行き先は国際福祉機器展だけに限ることなく、1人でも多くの「おでかけ」への希望を叶えたい。

廣渡一隆

福岡県出身。作業療法士として病院や老健施設、保健所などに勤務。現在は市内でリハビリセンターRebornを設立し、自費リハビリに携わる。

もうひとつのプロローグ

前野有咲

今回の取材には、もうひとつのプロローグがありました。

今年の5月、四倉にあるワンダーファームで、自転車とキャンプで旅を楽しむイベント「BIKE & CAMP TOUHOKU23」が2日間にわたって行われました。アウトドア好きやキャンパー、サイクリストが集うこのイベントに、私は広報スタッフとして参加することに。事前の打ち合わせでは、主催のみなさんから役割やスケジュールが共有され、準備万端で当日を迎えられるという状況でした。

…懸念点がなければ、準備万端で当日を迎えられそうなんてわざわざ書かないですよね。それもそのはず、当日を迎えるにあたり、ひとつ心配していたことがありました。それは、1日目夜のテント泊について。寝泊まりするのは4人用のテントで、事前のグループ分けでは、私と友人、そして筑波技術大学に通う2人の学生が同じグループに割当てられていました。

筑波技術大学は、日本で唯一、視覚障がい者と聴覚障がい者を入学対象とする国立大学法人です。「子どもを大学に進学させたい」と願う親御さんたちが中心となって立ち上げた設立運動がきっかけで、1987年に設立されました。今回のイベントには、同じグループの2人を含め、5人の学生と引率の先生が参加していました。

どう接するのがいいのだろうか。ひとまず怪我はさせないようにしよう・・・視覚障がい者のみなさんと関わりが少なかった私は、答えのみえないシミュレーションをぐるぐると続けながら、イベント当日を迎えました。

イベント1日目の午後。いわき市内のキッチンカーがにぎわい、アウトドアグッズや自転車用品がならぶワンダーファームに到着した学生のみなさんと合流し、夜に向けてまずはテントを組み立てることに。テントは、合流地点から少し離れた場所にあったため、走りまわる子どもたちに注意しながら目的地に向かいました。

早くテントを立てて2人に荷物を置いてもらおうと、友人と協力しながらテントの設営を進める私。「どうやってやるんですか？」と声をかけられていたものの、「危ないかもしれないので、私やっちゃいますよ」と答え、もくもくと設営を続けます。

その様子をみていた先生が、「〇〇、ここでカバーをもってほしい。〇〇は、右に移動して。2人とも足元にペグがあるから気をつけてね」と声をかけました。そこで私がみたのは、足と手をつかって立ち位置と役割をつかみ、いきいきとミッションをこなしていく2人の姿でした。

相手を傷つけないようによかれと思ってやっていたことは、むしろ余計なお世話だったのかもしれない。その後も微妙な気まずさを抱えたまま、そして結局2人には私から声をかけられないまま（話しても世間話程度）、とうとう2日間が終わりました。

喉に魚の小骨がずっと引っかかっている。そんな毎日を過ごしていた時に私のもとに舞い込んできたのが、白鳥さんの上映会のお知らせだったのです。然るべきタイミングにやってくるもんだな。あの時できなかった、相手の「声」を聞くチャンスになるかもしれない。車内でテント泊を振り返り、特別な思いを抱きながら上映会の会場・アリオスに向かっていました。

（P. 2につづく）

フクシ本のコーナー

商店街の復権

―歩いて楽しめるコミュニティ空間

広井良典・編

本書は、日本を含む世界各地の「商店街」の現状と課題を取り上げながら、持続可能なまちづくりを考える本だ。新書にしては大ボリューム。400ページ近くあり、商店街に対し研究的視座を向けてきた実践者・研究者の論考が8章にわたって展開されている。各地の膨大な実践例だけでなく、商店街が抱えがちな社会的・構造的課題、各種の調査結果も網羅されており、タイトルにあるような「商店街の復権」を目指す地域の人たち、いや、「商店街でなんかやりたいな」とうっすらと思っている人にとっても、うってつけの一冊だ。

本書の第4章にこんなことが書かれている。商店街は、利用者に交流や近隣情報の交換機会を提供し、地域への愛着や関心を喚起するとともに、地元店や個人店での消費傾向により地域内の住民への信頼感を高める。心当たりがある。平の駅前にある「FARO」というカフェにちょくちょく通うようになって、「平のまち」を考える時間が増えたし、駅前の再開発にも関心が出てきた。心理的距離が近まったのか、以前よりも平に行く機会が（お金を落とす機会も）増えた気がするのだ。

そしてなにより、商店街の機能や役割について考える時間が増えた。商店街は公共交通が整備されているから高齢者や障がいのある人も集まりやすいな、とか、学校にも近いから若者たちが自分の居場所を見つけるのにも一役買えるよな、とか。そんなふうに現実の商店街と本書を重ねて考えていくと、商店街とはもともと「フクシ的」だったのかもと思えてくる。もちろん、「実際にはそうなってはいない」ということも見えてくるわけだけれど。

この本の編者、広井良典さんは、ケア・死生観・コミュニティに関する研究者だ。商店街の「フクシ性」を意識しながら読んでみると、本書の魅力は2倍3倍に増大するはずだ。さて、我が地元、小名浜はどうだろうか。自分の地元の商店街を見直すきっかけも、本書は与えてくれるだろう。

小松理虔

『商店街の復権 －歩いて楽しめる
コミュニティ空間』
広井良典・編　ちくま新書

編集後記

前野有咲

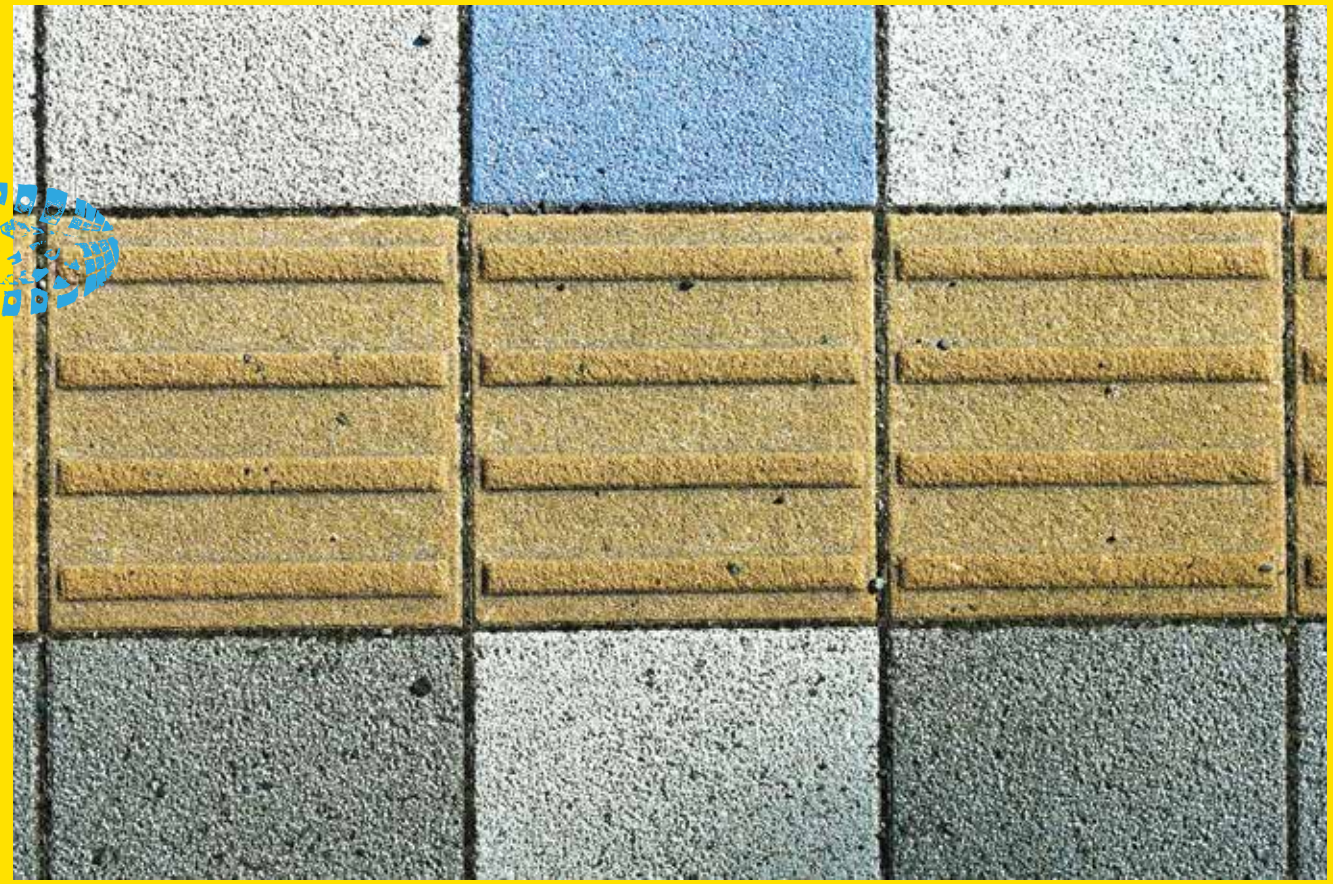
「目の見えない白鳥さん、アートを見にいく」の上映会を皮切りに、今号は「視覚障がい」をテーマに、各地で行われている取り組みを取材しました。視覚障がいに詳しくもなければ、福祉の専門家でもない私は、取材中数々の「わからない」にぶつかり続けました。視覚障がいに向き合っているようで、実は己の中の「わからなさ」と向き合っているのではないか…？そんな感覚になることも度々ありました。

取材を終えた今、改めて思うのは、日常で「わからなさ」にであう場面が圧倒的に少ないということです。自分の認識でいかようにも捉えられる世界に身を置いていると、自分の考えや社会のあり方に疑問を抱かなくなります。そうして、考えないようにし続けた結果、「わからない」は怖いこと、自分には関係ないことだと決めつけてしまうのではないでしょうか。

私にとって、「わからないを面白がる」ことへのハードルはまだまだありますが、その手前にある「わからないを受けとめる」ことを今後も大事にしていきたいと思います。

紙のいごく 14号
2024年3月1日発行

igoku 編集部

編集長＝後藤美穂
プロデューサー＝渡邊陽一
ライター＝前野有咲　小松理虔　江尻浩二郎
デザイナー＝髙木市之助
ビデオグラファー＝田村博之
発行＝いわき市地域包括ケア推進課
印刷＝株式会社 植田印刷所

いわきのいごきを伝えるウェブマガジン「いごく」
https://igoku.jp